

幼稚園

令和5年度

教育研究員研究報告書

幼稚園

東京都教育委員会

目次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究構想図	2
III	研究内容	3
	1 目指す幼児像の具体的な姿を明らかにする	3
	2 「幼児が互いに思いや考えを表現し合うために必要な経験」と「幼稚園の中で『協同性』 が育まれる過程」を明らかにする	3
	3 友達や集団の中で、幼児一人一人のよさが生きるための保育者の援助と環境 の工夫を探る	4
IV	検証保育	7
	1 2年保育 5歳児 9月中旬	7
	2 3年保育 5歳児 10月中旬	10
V	研究の成果	13
VI	今後の課題	14

研究主題

互いに自分の思いや考えを表現し合い、自己を発揮する幼児の育成 ～友達や集団の中で、一人一人のよさが生きるための保育者の援助や環境の工夫～

I 研究主題設定の理由

幼稚園教育要領第1章総則 第1「幼稚園教育の基本」では、「幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。」¹と示されており、「その際、教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の理解と予測に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。」²と示されている。

また、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（中央教育審議会 令和3年1月26日）第I部 総論「3. 2020年代を通して実現すべき『令和の日本型学校教育』の姿」の「(1) 子供の学び」では、「幼稚園等の幼児教育が行われる場において、(中略) 質の高い教育が提供され、良好な環境の下、身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で達成感を味わいながら、全ての幼児が健やかに育つことができる。」³と示されている。

本研究では、各園の幼児の実態を検討するに当たり、「幼児が身近な環境に主体的に関わる中で、自分なりの思いや考えをもち、保育者や友達に自分の思いや考えを伝えようとする姿が見られること」や、一方で、「自分に自信がもてず、友達に対してすすんで思いや考えを表わすことが難しい。」「集団の中では、友達の考えに合わせたり、ありのままの自分を表せなかったりする。」が共通の意見として出された。

「令和5年度全国学力・学習状況調査の結果(概要)」(文部科学省・国立教育政策研究所)の3(4)では、「主体的・対話的で深い学びや個別最適な学びに関する設問と児童生徒の自己有用感等に関する設問との間には相関が見られる。」「主体的・対話的で深い学びや個別最適な学びが、児童生徒の自己有用感等に影響を与えている可能性がある。」⁴との分析が示されており、このことから、幼児が主体的に自分の思いや考えを表出したり伝えたりするためには、幼児自身が周囲から認められているという安心感や自己有用感等をもちながら、自己を発揮することが重要であると言える。

以上のことを踏まえ、本研究では、研究主題を「互いに自分の思いや考えを表現し合い、自己を発揮する幼児の育成」と設定し、幼児が、友達や集団の中で思いや考えを表現し合ったり、安定した情緒の下で自己を発揮したりするためには、保育者の援助と環境の工夫が重要であると考え、副題を「友達や集団の中で、一人一人のよさが生きるための保育者の援助や環境の工夫」と設定した。

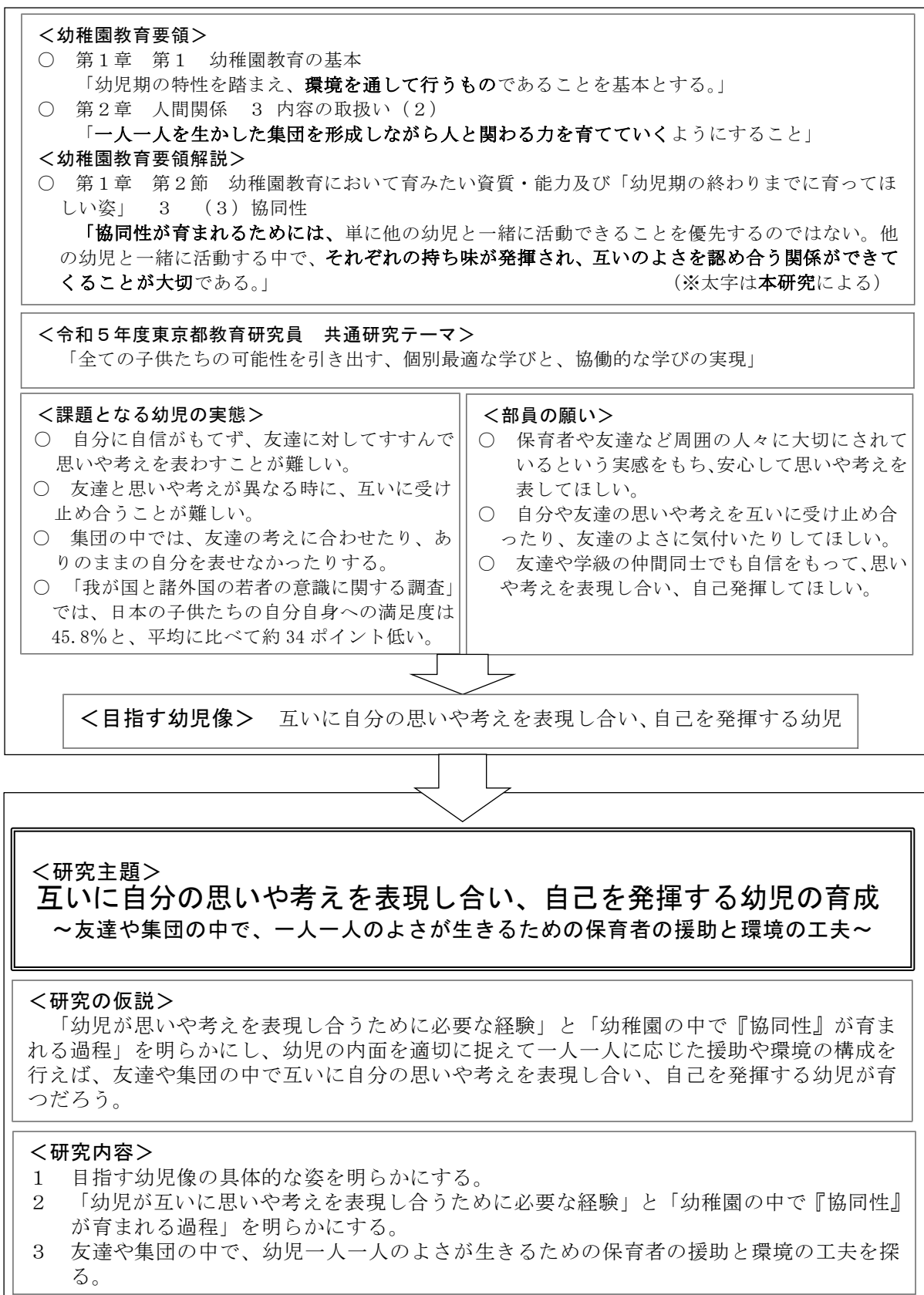
¹ 幼稚園教育要領（文部科学省 平成30年3月） p.13

² 同上

³ 中央教育審議会 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（令和3年1月） p.4

⁴ 文部科学省・国立教育政策研究所 令和5年度 全国学力・学習状況調査の結果(概要) p.33

II 研究構想図



Ⅲ 研究内容

1 目指す幼児像の具体的な姿を明らかにする

(1) 本研究における「表現し合う」の捉え

幼児教育における「表現」については、幼稚園教育要領解説⁵に次のようにされている。

幼児は、幼稚園生活において多くの他の幼児や教師と触れ合う中で、自分の感情や意志を表現しながら、自己の存在感や他の人々と共に活動する楽しさを味わい、ときには幼児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通して互いに理解し合う体験や、考えを出し合ってよりよいものになるよう工夫したり、一緒に活動する楽しさを味わう体験を重ねながら関わりを深め、共感や思いやりなどをもつようになる。

このことから他者に対して、言葉だけでなく、声や表情、身体の動き等、様々な自分の思いや考えを表現できるようにすることが重要である。そこで、本研究では、「幼児が自分なりの方法で、友達や集団の中で自分の思いや考えを表出できるようにする」ことを「表現し合う」と捉えた。

(2) 本研究における「自己を発揮する」の捉え

自己を発揮することについては、幼稚園教育要領解説⁶に次のように示されている。

幼児は、周囲の人々に温かく見守られ、ありのままの姿を認められている場の中で、自分らしい動き方ができるようになり、自己を発揮するようになる。

このことから、幼児が自己を発揮するためには周囲からありのままの姿を認められているという安心感をもつことが大切であることが読み取れる。また、表現することと同じく、自分らしく動いたり、自分の思いや考えを表したりする等の自己の発揮の仕方は幼児によって様々であり、一人一人が自分なりの方法で自己を発揮することができるようにすることが大切であると考えた。そこで本研究は、「幼児一人一人が安心感をもち、友達や集団の中でも自分の持ち味を発揮しながら遊びや生活に取り組む」ことを「自己を発揮する」と捉えた。

2 「幼児が互いに思いや考えを表現し合うために必要な経験」と「幼稚園の中で『協同性』が育まれる過程」を明らかにする

(1) 幼児が互いに思いや考えを表現し合うために必要な経験について

部員が実践してきた幼稚園における生活や遊びの事例を基に、幼児が互いに思いや考えを表現し合うようになるためには、具体的にどのような経験が必要になるのか協議をした。そして、以下の図1のように、幼児が自分の思いや考えをもち、それをどのように表出していくのかという過程を捉え、互いに表現し合うことに向かうためにどのような経験が必要かを整理した。

⁵ 幼稚園教育要領解説（文部科学省 平成30年3月） p. 245

⁶ 幼稚園教育要領解説（文部科学省 平成30年3月） p. 184

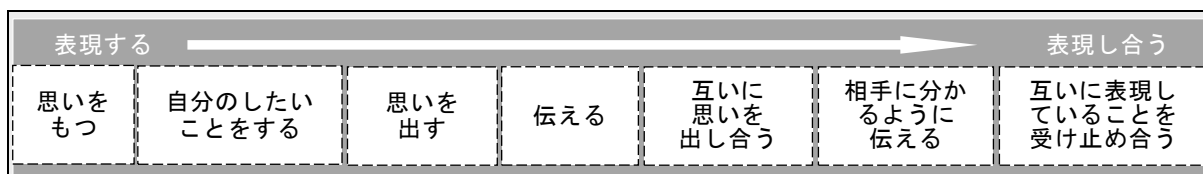


図1 幼児が互いに思いや考えを表現し合うために必要な経験

(2) 幼稚園の中で「協同性」が育まれる過程について

幼児が表現し合うために必要な経験を分析していく上では、「友達と共通のイメージをもつ」や「友達と共通の目的をもつ」など、「協同性」に関する視点が必要となる。幼児期における「協同性」については、幼稚園教育要領解説⁷で次のように示されている。

協同性は、領域「人間関係」などで示されているように、教師との信頼関係を基盤に他の幼児との関わりを深め、思いを伝え合ったり試行錯誤したりしながら一緒に活動を展開する楽しさや、共通の目的が実現する喜びを味わう中で育まれていく。

このことから、保育者との信頼関係から自己を発揮していくことと、協同性の観点は密接に結びついていることを改めて確認した。

そこで、「幼児が互いに思いや考えを表現し合うために必要な経験」と関連する「幼稚園の中で『協同性』が育まれる過程」を以下の図2のように整理した。また、幼児が安心して自分の思いや願いを表現し、自己を発揮する上では、安心感や自信をもつことが欠かせないため、「幼児が互いに思いや考えを表現し合うために必要な経験」と「『協同性』が育まれる過程」の基として「自己を発揮するための基盤」を以下のように位置付けた。



図2 「幼児が互いに表現し合うために必要な経験」と関連し合う要素

3 友達や集団の中で、幼児一人一人のよさが生きるための保育者の援助と環境の工夫を探る
幼稚園教育要領解説⁸には、「幼児一人一人のよさが生きる」ことについて次のように示されている。

⁷ 幼稚園教育要領解説（文部科学省 平成30年3月） p.58

⁸ 幼稚園教育要領解説（文部科学省 平成30年3月） p.58

協同性が育まれるためには、単に他の幼児と一緒に活動できることを優先するのではない。他の幼児と一緒に活動する中で、それぞれの持ち味が発揮され、互いのよさを認め合う関係ができてくるのが大切である。

このことから、幼児一人一人のよさが十分に生きるためには、保育者が幼児の活動場面において幼児の内面を適切に捉え、友達や集団と個々の幼児との関係を受け止めた上で、保育の手だてを考えていくことが重要となる。そこで、互いに表現し合うことに向かう幼児の内面を適切に捉えるために、事例を基にしながら、幼児の内面を捉える観点を設定することにした。上記、幼稚園教育要領解説にある内容を踏まえ、幼児の内面を捉える観点として「自己発揮（個）」、「友達や遊びへの関心（関心）」、「他者への働き掛け（働き掛け）」の三つを設定した。そしてこの三つの観点を基に、保育場面の分析を行った。

〈保育場面の事例 5歳児7月 グループでのお店屋さんごっこ(おばけたたきゲームの遊び)〉

<p>幼児と保育者の言動</p> <p>(—— は幼児の内面を捉えるための言動に対応した箇所 ……は分析の援助と環境の工夫に対応した箇所)</p>	<p>分析</p>	
<p>A児：<u>黙々とおばけたたきに使うハンマーを直している。</u> 保育者：他の遊びと行き来しながら様子を見守る。</p> <p>B児：「まだ修理中なの？」</p> <p>A児：無言でしばらく修理をした後、「これでいいよ。もういいよ。」と言ってお客さん役のC児にハンマーを渡し、おばけを動かす場所に隠れる。</p> <p>お客さんがやってきておばけたたきが始まるが、おばけが出る穴が破れてしまう。</p> <p>D児：「E君がこれ壊した。」と言い、A児の顔を見る。 A児：<u>ガムテープで穴の修理を始める。</u> 保育者：「何の修理が必要なの？」と聞く。</p> <p>A児：<u>「ここ。」</u>と言って、壊れた穴を指す。</p> <p>保育者：<u>「優しくたたいてって言うてみた？」と聞く。</u> A児：<u>保育者の言葉を受けて、「穴から優しくやって、E君。」</u>とEに伝える。</p> <p>A児：ゲームが再開すると、おばけの出る穴から<u>素早くお化けを出したり引っ込めたりする。</u></p>	<p>○ A児の内面の捉え (幼児の内面を捉える観点)</p> <p>○ 自分が興味をもったことに没頭している。(個)</p> <p>○ お客さんや仲間である友達の様子がよく見えている。(関心) (働き掛け)</p> <p>○ 遊びを進めるために、自分ができることをしている。(働き掛け)</p> <p>○ 保育者に対し、自分のしていることを伝える。(働き掛け)</p> <p>○ 保育者の言葉掛けがあれば、自分なりに相手に伝えようとする。(働き掛け)</p> <p>○ 自分なりに工夫して遊ぶ。(個)</p> <p>○ 保育者の言葉に喜びを感じる。(関心)</p>	<p><u>表現し合うために必要な経験</u> <u>協同性が育まれる過程</u> ・ 保育者の援助</p> <p><u>思いをもつ</u> <u>自分のしたいことをする</u> <u>自分なりの目的をもつ</u> ・ 幼児の様子を見守る。</p> <p><u>自分のしたいことをする</u> <u>イメージを共有する</u></p> <p><u>思いをもつ</u> <u>自分なりの目的をもつ</u></p> <p>・ A児のしていることを認め、周りの幼児にも気付かせる。 <u>思いを出す</u> <u>伝える</u> <u>自分のしたいことをする</u> <u>自分なりのイメージを</u></p>

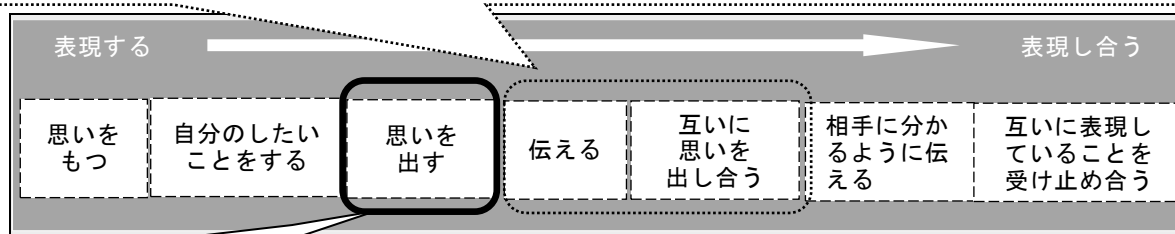
<p>保育者：「A君のお化けはすごく早いね！」 A児：<u>保育者に言葉を掛けられ、笑顔になる。</u></p> <p>〔集合時の振り返り場面〕 保育者：「おばけたときはどうだった？」 A児：「<u>E君がハンマーを強く叩いた。</u>」</p> <p>保育者：「それでA君はどうしたの？」 A児：「直した。」</p> <p>保育者「ハンマーは大丈夫そう？」 A児：「多分ね。」</p>	<p>○ 保育者の投げ掛けによって表現する。(働き掛け)</p>	<p>もつ</p> <ul style="list-style-type: none"> A児なりの表現を認める。 <p>思いを出す 伝える</p>
---	----------------------------------	---

事例の分析から、幼児の内面を捉えるための三つの観点を基に、A児がこの場面において「自分の思いや考えを表現し合うために必要な経験」のどの過程にいるのかを、図1に照らし合わせて話し合った。実線の吹き出しで示している部分は、三つの観点から捉えたA児の実態であり、それを基にして、事例の場面における必要な経験を黒枠で囲った。点線で囲った部分は、今までの実態から保育者が当初もっていたA児に対する願いであり、点線の囲いについては、経験してほしい段階である。

なお、本事例は、7月上旬に実施した保育観察において、内面を捉える観点を探るために、図1を基に分析した。

【今までの実態から保育者が考えていたA児に対する願い】 **伝える** **互いに思いを出し合う**

自分の考えを友達に表現し、受け止められたり共感されたりする経験を積み重ねて、自信をもって表現したり挑戦したりする力につながってほしい。



三つの観点から捉えたA児の実態

◎自己発揮 (個)	自分の興味をもったことに没頭したり、自分なりに考えて工夫して遊んだりする。
○友達や遊びへの関心 (関心)	グループの仲間や、お店に来るお客さん役の友達の様子をよく見ている。
☆他者への働き掛け (働き掛け)	保育者に自分のしていることを伝えたり、保育者の言葉掛けによって自分なりに相手に伝えようとしたりする。

【事例場面でのA児に対する願い】 **思いを出す**

自分のやりたいことを実現させながら、自分の思いや考えを出していく経験を積み重ねていってほしい。

三つの観点を基に事例の場面でのA児の実態を捉えたところ、A児はこの場面では、自分の興味をもったことを十分に楽しんでおり、周囲の友達や遊びには関心を向けているものの、保育者からの言葉掛けがないと、「伝える」や「互いに思いを出し合う」経験には至らない実態であることが分かった。そこで、この三つの観点の捉えから、「思いを出す」経験をしたい

るのではないかと話し合った。当初、学級担任はA児のこれまでの遊びの実態から、互いに表現し合うために、「伝える」や「互いに思いを出し合う」という経験をすることを願っていた。しかし、幼児の内面を三つの観点を基に捉えることで、事例の遊びの場面においては、予想していた学級担任の考えとは異なる経験の段階にいたることが明らかになった。

事例の検討から、三つの観点を基に幼児の行動と内面を捉えることは、幼児一人一人のよさが生かされ、さらに互いに自分の思いや考えを表現し合い、自己を発揮する幼児を育てるための保育者の適切な援助と環境の工夫を探るために有効であることが分かった。

IV 検証保育

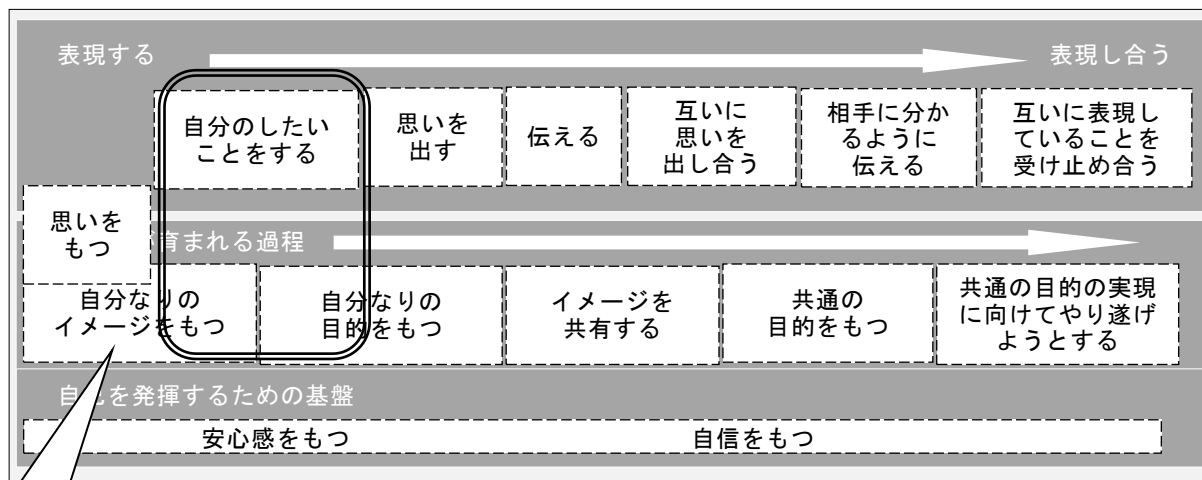
保育者が幼児一人一人の姿を見取り、活動や遊びの中で必要な経験を適切に捉えて援助することで、幼児が自分の思いや考えを表現し合い、自己を発揮する姿につながるかを検証するため、三つの観点で幼児の実態を捉えた上で、検証保育を行った。

1 2年保育 5歳児 9月中旬

(1) 好きな遊び・遊びの振り返りの場面におけるF児の姿

＜F児の実態と必要な経験の捉え＞

F児は友達と共有のイメージで遊ぶ中で、友達の意見に添いながらも自分なりの言葉や動きでしたいことを表現することが予想される。F児の姿を図2と照らし合わせると、二重線で囲った部分が検証保育において予想されるF児に必要な経験であり、吹き出し部分はF児の予想される姿である。



三つの観点から捉えた検証保育の場面でのF児の予想される姿

◎自己発揮 (個)	友達の言動を真似て遊ぶことが多く、 <u>自分なりの言葉や動きが少ない。</u>
○友達や遊びへの関心 (関心)	友達のイメージに沿ってごっこ遊びを楽しむようになってきている。
☆他者への働き掛け (働き掛け)	意見を尋ねられると自分事として捉えられず、 <u>友達の意見に沿うことが多い。</u>

(※波線部分は、表現し合う姿を示す)

<ねらい>

友達との関わりの中で、自分なりの動きや言葉を出して遊ぶことを楽しむ。

予想されるF児の姿	・保育者の援助 ●環境の工夫
<p>【水族館ごっこ】</p> <p>◎ 自分のしたいことよりも、気の合う友達がしている遊びをしようとする。</p> <p>○ 気の合う友達のイメージや思いに沿って、大型積み木で場づくりをしたり、遊びに必要なものをまねて作ったりする。</p> <p>☆ 友達と思いを出し合う場面では、自分の思いや考えを、動きや言葉で出そうとしない。</p> <p>【遊びの振り返り】</p> <p>○ 保育者の問い掛けで、自分が経験したことを自分なりの言葉で伝えようとする。</p>	<p>● F児がやってみたいと思えるよう、今までに扱ったことのある素材や、自分なりにイメージがもてるような素材を用意する。(水族館職員の名札、廃材、色画用紙、ダンボール、ごご、等)</p> <p>・ 会話や動きなどからF児の興味関心を把握し、言語化したり、動きを表現するモデルを示したりすることで、自分のしたいことが明確になるようにする。</p> <p>・ F児の楽しんでいることを認め、周囲の友達にも知らせることで、友達と遊ぶ中で自分のしたいことができるようにする。</p> <p>・ 降園前の集まりや振り返りの中では、F児の話を引き出し、友達の中で自分のしたいことができた具体的なエピソードと関連付けて認め、F児の行動を価値付ける。</p>

(2) 当日の保育における記録と分析

幼児と保育者の言動	分析	
<p>(——は幼児の内面を捉えるための言動に対応した箇所 ……は分析の援助と環境の工夫に対応した箇所)</p>	○ F児の内面の捉え (幼児の内面を捉える観点)	<p>表現し合うために必要な経験 協同性が育まれる過程</p> <p>・ 保育者の援助と環境の工夫</p>
<p>F児：G児と一緒に水族館ごっこを始める。 <お客さんを探しに行く場面> F児：<u>黙って水族館ごっこの場から離れ</u>、他の友達が遊んでいる場に行く。</p> <p>保育者：<u>「どうしたの？」と尋ねる。</u> F児：<u>「H君と先生に、G君がチケット渡したのに…。」</u></p> <p>保育者：<u>「GさんがHさんとI先生にチケットを渡したのに、来ないのね。」とF児の言葉を補って状況を整理する。</u></p> <p>G児：F児と保育者が話していることに気づきF児のところに向かう。 G児：<u>「開店しているって分かっているのかなあ？」</u>と言い、傍で製作をしているJ児にチケットを渡す。</p>	<p>○ 二人で遊んでいるが、互いを意識して動いていない。(関心)</p> <p>○ F児の返答から「お客さんに来てほしい」という思いがあると分かる。(働き掛け)</p> <p>○ F児は保育者に思いを出す、一緒に遊ぶ友達には出そうとはしない。F児の思いを保育者が言語化することで、G児に伝わる。(働き掛け)</p>	<p><u>思いをもつ</u> <u>思いを出す</u> <u>自分なりの目的をもつ</u></p> <p>・ F児の状況を尋ね、思いを探る。</p> <p>・ 言葉を補って表現方法を知らせる。F児の思いを言語化する。 <u>思いを出す</u> <u>自分なりの目的をもつ</u></p>

<p>保育者：結局客が見つからなかったため、<u>客役となって水族館へ行くこととなる。</u></p> <p><ウミヘビの餌やりの場面> F児：牛乳パックを組み合わせてできたウミヘビを手に持ち、餌をあげられるように客役となった <u>保育者の手元にウミヘビの顔を近付ける。</u> 保育者：「<u>餌をあげられるの？噛まれないかな？</u>」と言いながら、ウミヘビの餌やり体験を幼児と一緒に楽しむ。 F児：保育者の反応を喜びながら、ウミヘビを動かす。</p> <p><片付け場面> G児：「<u>楽しかったね、今日も。</u>」 F児：「<u>明日もやる？</u>」「<u>片付けしないと</u>」とG児に声を掛けて片付けを始める。段ボールを畳むと、「<u>オッケーこれで。Gちゃん見て。</u>」と言う。 G児：その場にいる。 F児：ゴザを一人で丸め始め、「<u>ちょっとーGちゃん、片付けー!</u>」と再び声を掛ける。 G児：F児の言葉に気付き、一緒に物をカゴにしまったり、水族館の人の証である青い名札を取ったりする。</p> <p><振り返りの場面> 保育者に呼ばれてF児とG児がみんなの前に入る。 保育者：<u>どんな遊びをしたか尋ねる。</u> G児：「<u>ホテルを作った。</u>」と話し始める。 保育者：<u>黙っているF児に発言を促す。</u> F児：「<u>寝てたよ。</u>」と一言だけG児の話題と関連したことを言う。 保育者：<u>F児の言葉を拾い「このホテル、寝心地がよくて本当にJさんは寝ていたらいいね。」とその時の状況を言葉で補う。</u> 他の幼児数名：「<u>行ってみたい!</u>」と言う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 保育者が客役となってやりたいことが十分に行えるようにすると、友達の数が多い実態があったF児だが、自分からウミヘビを動かし、興味をもったことに取り組んだり、保育者と関わろうとしたりする。(個)(働き掛け) ○ F児とG児は、楽しい気持ちを共有している。(働き掛け) ○ 明日も水族館ごっこをするという、共有のイメージをもち、F児はG児と一緒に片付けを行おうと声を掛ける。(働き掛け) ○ F児は自分の言葉がG児に伝わっていないことに気付き、再度声を掛ける。(関心)(働き掛け) ○ F児はみんなの前で発言する場面では、遊びの場面とは違い、言葉が出てこない。(個) ○ G児の話を聞いた後だと言葉が出る。(働き掛け) ○ G児の話から、印象に残ったことを自分なりの言葉で伝える。(働き掛け) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ F児とG児の思いを、保育者が客役となり具現化する。 <p><u>自分のしたいことをする</u> <u>自分なりの目的をもつ</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ F児の楽しんでいることを言語化し、共感する。 ・ 客役となり一緒に楽しむ。 <p><u>伝える</u> <u>イメージを共有する</u> <u>伝える</u></p> <p><u>思いを出す</u> <u>イメージを共有する</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 話しやすい発問と話す機会をつくり、思いを引き出す。 ・ 幼児の話したいことを推測し、言語化し表現方法を知らせる。
--	---	---

(3) 考察

- ・ F児の実態を三つの観点を基に捉え、「自分のしたいことをする」段階であると把握し、援助や環境の工夫を行った。実際にウミヘビの餌やりの場面では、自分なりにウミヘビを動かしながら保育者との関わりを楽しみ「自分のしたいことをする」経験をしていた。このことから、実態を捉えるには三つの観点が有効であることが分かった。
- ・ F児の「互いに思いや考えを表現し合うために必要な経験」について、お客さんを探しに行く場面では「思いをもつ」経験をし、ウミヘビの餌やりの場面では「自分のしたいことをする」経験をしていた。振り返りの場面では「思いを出す」経験、片付けの場面では「伝える」経験をしていた。これらのことから、遊びの場面ごとに「互いに思いや考えを表現し合うために必要な経験」の各段階を幼児が行きつ戻りつしていることが

分かった。

- ・ F児の「協同性が育まれる過程」においても、お客さんを探しに行く場面とウミヘビの餌やりの場面では「自分なりの目的をもつ」過程であり、片付け場面と振り返りの場面では、「イメージを共有する」過程にいた。これらのことから、「協同性が育まれる過程」において幼児が遊びの場面ごと各過程を行きつ戻りつしていることが分かった。

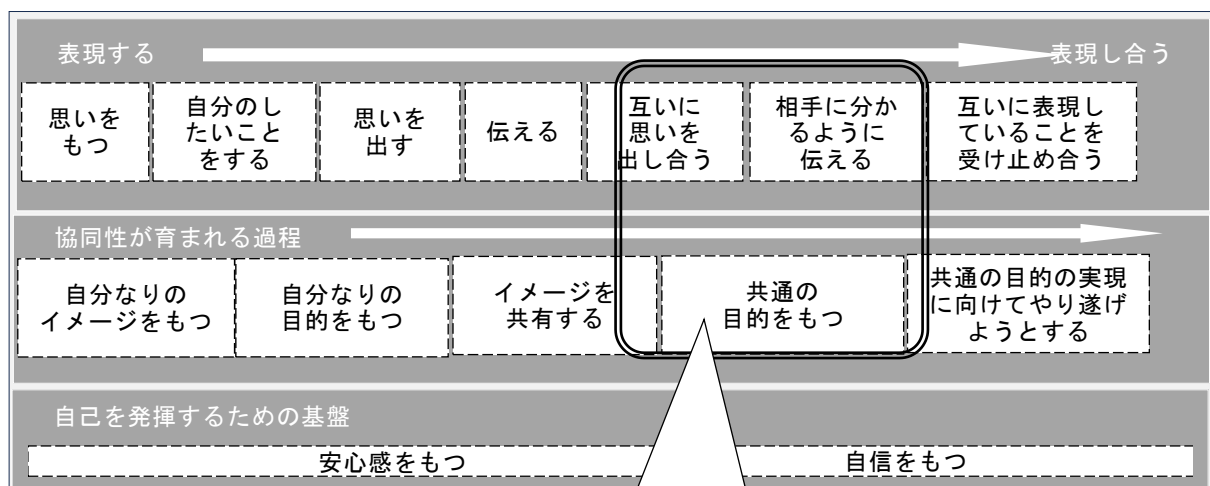
以上の検証保育の考察から、幼児が互いに思いや考えを表現し合うために必要な経験を行きつ戻りつする幼児の実態を、場面ごとに的確に捉えて援助できるようにするため、「互いに思いや考えを表現し合うために必要な経験」と「協同性が育まれる過程」の捉えに幅をもたせて、よりの確に幼児の姿を捉えられるように指導案の書き方を見直し、2回目の検証保育を行った。

2 3年保育 5歳児 10月中旬

- (1) 好きな遊びでのグループ活動(運動会に向けたフラッグの踊り)・振り返りの場面におけるK児の姿

< K児の実態と必要な経験の捉え >

K児は、共通の目的の実現に向かう活動の中で、自分の思いを出すだけでなく、相手の思いを聞いたり、相手に分かってもらえるように伝えようとしたりと予想される。K児の姿を図2と照らし合わせると、二重線で囲った部分が、検証保育において予想されるK児に必要な経験であり、吹き出し部分はK児の予想される姿である。



三つの観点から捉えた検証保育の場面でのK児の予想される姿

◎自己発揮 (個)	自分のしたいことをすすんでしようとしたり、 <u>保育者や友達に思いを自分なりの言葉で伝えようとしたりする。</u>
○友達や遊びへの関心 (関心)	友達への関心は強くあり、鬼遊びやごっこ遊びなどを楽しむ。自分のやりたいことは一人でも夢中になって遊ぶ。
☆他者への働き掛け (働き掛け)	自己を発揮している場面では <u>思いが強すぎて、相手の言葉を受け止める</u> ところまで至らない。 <u>思いが伝わらないと分かると、諦めてその場を離れる</u> こともある。

(※波線部分は、表現し合う姿を示す)

<ねらい>

友達と思いを出し合う中で、思いが伝わらないもどかしさを味わいながらも、目的に向かって、自分なりにその遊びや活動に対して諦めずに取り組む。

思いや考えを表現し合うために必要な経験	協同性が育まれる過程	○ 予想されるK児の姿	・ 保育者の援助 ● 環境の工夫
友達と互いに思いを出し合う ↑ 相手に分かるよう伝える ↓	共通の目的をもつ ↑ ↓ 共通の目的の実現に向けてやり遂げようとする	○ 友達と互いに思いを出し合う。自分の思いを伝えるが、相手が受け止めてくれないことに戸惑ったり、怒ったりする。自分の思いを通したい気持ちから、相手の気持ちを受け止められない。 ○ 共通のイメージはあるが、細かい部分のイメージが思うように伝わらないもどかしさを感じる。	・ 一人一人の話を聞き、受け止めていく。 ・ 必要に応じて、互いの気持ちを分かりやすく説明したり、視覚的に具現化するなど援助を工夫したりしながら、互いに相手の気持ちが想像できるようにしていく。 ・ 思いの橋渡しだけでなく、遊びの中でのイメージの共有化を図り、互いに共通のイメージの中で遊びを進めることができるように促す。
		○ グループの友達と一緒に遊びたい思いはあるが、目的やめあてが共通になりにくかったり、遊びの進め方が決められなかったりする。 ○ 本児なりに何とか進めようと考え、自分の思いや考えを相手に分かるよう伝えようとする。	・ グループの中で、互いの思いに気付いているか、一人一人の思いや考えを確認していく。 ・ グループとしてこの遊びをどうしていきたいのか、どうしたら実現できるのかを探り、幼児の考えを整理して言語化する。 ・ 共通の目的やめあてがもてるように、相手への伝え方や伝わりやすい言葉などについて一緒に考える。
		○ 友達と思いを出し合うだけでなく、思いがうまく通じ合い、考えがまとまる心地よさを味わう。	● 互いの思いや考えのよさを言語化し、自己有用感を味わいながら、グループの考えがまとまり、共通の目的に向かう気持ちももてるように、静かな場所で話し合えるようにする。 ・ 実現する嬉しさや達成感に共感したり、友達と一緒にだからこそできたことを価値付けたりする。

(2) 当日の保育における記録と分析

幼児と保育者の言動	分析	
(——) は幼児の内面を捉えるための言動に対応した箇所 (.....) は分析の援助と環境の工夫に対応した箇所	○ K児の内面の捉え (幼児の内面を捉える観点)	表現し合うために必要な経験 協同性が育まれる過程 ・ 保育者の援助と環境の工夫
<仲間と振り付けを教え合う場面> グループの5人全員が集まり、踊り始める。		

<p>K児とL児は自信をもって踊るが、M児、N児、O児は難しい振り付けの部分で思うようにいかず、次第に表情が曇っていく。その姿を見てK児とL児は2グループに分かれて教えることを思いつく。保育者はM児とK児のやりとりを見守る。</p> <p>K児：M児に教え始める。<u>向かい合い、ゆっくりと手を動かしながら「これできるかな。Mちゃん、できる？」と聞く。</u></p> <p>M児：K児のまねをして何度かやるうちに振りが少しできるようになる。</p> <p>K児：「<u>できているよ。これを速くすればいいの。</u>」と言い、<u>フラッグを早く動かして見せる。</u></p> <p>M児：K児が早くフラッグを動かす姿を見るが、進んで動こうとしない。</p> <p><仲間に練習を誘う場面> 保育者：「<u>ずいぶん練習しているけど、そろそろみんなで踊る？</u>」 N児：その場に座り込む。 保育者：「<u>N君疲れちゃった？</u>」 N児：「<u>疲れちゃった。</u>」 保育者：「<u>発表会はやらない？</u>」 N児：俯いて眉間にしわを寄せながらうなずく。 その姿を見た他の幼児から、「褒めてもらうためにはやらないと。」「私たちのグループだけ発表会をしないのは嫌だ。」という声があがる。 K児：「<u>運動会まであと7日だよ。</u>」 保育者：「<u>あと何回か分かれば頑張れるかな。</u>」</p> <p>N以外の幼児：「<u>あと2回にする？</u>」と話し合う。 L児：「<u>あと2回だけだよ。</u>」 N児：首を横に振る。</p> <p>K児：「<u>1回ならどう？できそう？</u>」 N児：頷き、立ち上がる。 K児：「<u>先生見てて。</u>」と嬉しそうに保育者に言う。<u>そしてみんなで最後の1回を踊る。</u> 保育者：「<u>N君もよく頑張ったし、先生嬉しかったのは、みんなN君が楽しくできるように考えていたよね。みんな大きくなったなって思ったよ。発表会頑張ろうね。</u>」 K児：嬉しそうな表情になる。</p> <p><友達に伝えたかったことを話す場面> 踊りを終えた後、移動しながらK児が保育者に「<u>テントのところは、腕を伸ばしてほしい。</u>」と伝える。「<u>そうだね。発表会の前に友達に言ってみたらいいんじゃない？</u>」と保育者が答えると、うなずく。発表会の前に小さい声で話し出すが、友達は気付いてくれない。するとL児が気付き、みんなの注目を向け、<u>K児は自分の言葉で伝えることができた。</u></p>	<p>○ 自分が提案したフラッグの技を、友達に教えようとするが、思うような反応が得られない。M児に分かるように動きをゆっくりと見せたり、褒めたりして、何とか相手に分かってもらえるように伝えようとする。(関心)(働き掛け)</p> <p>○ N児の素直な思いを受けて、K児を含めグループの友達一人一人が焦りを感じている。発表会を実現するために、どうしたらN児がやる気になってくれるか自分たちなりに残りの回数を考えたり、話し掛け方を考えたりしている。(関心)(働き掛け)</p> <p>○ 他の幼児と共にK児が自分なりに考えてN児に話しかけたり、提案したりしている。(関心)(働き掛け)</p> <p>○ あと1回と回数を譲歩したことで、N児が受け入れたことが嬉しい。(関心)</p> <p>○ 活動を通して、友達に自分の考えを伝えたいという気持ちをもっている。(関心)(働き掛け)</p> <p>○ 相手に伝えたい気持ちをも自分なりに伝え、聞いても</p>	<p>相手に分かるように伝える 共通の目的をもつ</p> <ul style="list-style-type: none"> グループの友達と話し合いやすい場所を提案する。 幼児同士の関わりを見守る。 <p>相手に分かるように伝える 共通の目的の実現に向けて</p> <ul style="list-style-type: none"> N児の様子を周りに伝え気付かせる。 見通しがもてるような言葉掛けをし、主体的に幼児同士が関わる姿を見守る。 <p>・ 仲間と一緒に考えながら取り組めたことを価値付ける。</p> <p>思いを出す⇔伝える 自分なりの目的をもつ</p> <ul style="list-style-type: none"> 思いを受け止め、伝える場を提案する。
--	---	--

<p><発表会の振り返り場面> 発表会を終え、保育者が一人一人に頑張ったことを聞く。K児は「上下のところ。」と答える。「<u>「どういうところを頑張った？みんなと合わせるところ？ピーンと伸ばすところ？」</u>と聞くと、「<u>「ピーンと伸ばすところ。」</u>と答える。次にL児が話す番になる。「Kちゃんが教えてくれた前後ろのところ。」と答えたため、保育者は「<u>「Lちゃんは最初はできなかつたんだけど、いっぱい練習したんだよね。Kちゃんも教えてあげたから、それを頑張ってくれて嬉しいね。」</u>と伝えた。すると<u>K児は照れたように頷いた。</u>」</p>	<p>らうことで安心して発表会に取り組む。(個)</p> <p>○ 自分の言葉でうまく伝えられない部分に対して、保育者から具体的な言葉の選択肢を提案されたことで、伝えることができる。(個)</p> <p>○ K児はL児から認められたことが嬉しい。(関心)</p>	<p>伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 課題に向かって取り組んだことを発表できる場を用意する。 ・ 自分の思いや考えを話せる場を意図的に用意する。 ・ 具体的な言葉を提案しながら問い掛ける。 ・ K児とL児の経験を振り返りながら、L児の姿もK児の思いも価値付ける。
---	---	---

(3) 考察

- 本時の活動では、幼児により思いの出し方は様々であるが、互いに思いを出しながら目的の実現に向けて取り組もうとする姿が見られた。思いを出し合うようにするためには、保育者はまず、幼児一人一人の思いを受け止めていくことが大切である。その上で、言葉でうまく思いを表すことが難しい幼児が、動きや表情で表出している思いを言語化し、友達の思いや考えを思い描けるようにしていくことが必要な援助と考える。その援助を受けて、相手にも思いや考えがあることを実感し、どうしたら相手に分かってもらえるのかを考え、「相手に分かるように伝える」という姿が生まれるのではないかと推察する。
- 本児の実態を三つの観点で捉えることで、K児が相手に分かるように伝える場面では、目的やめあてが共通になりにくいという課題があることが分かった。目的が再認識できるような援助を考え、見通しがもてるような言葉掛けをしたことで、K児は「相手に分かるように伝える」経験ができた。以上のことから、実態を三つの観点で捉え援助することは有効であることが検証できた。
- 2回目の検証保育では、表現し合うために必要な経験を、「互いに思いを出し合う」から「相手に分かるように伝える」まで幅をもたせて捉え、援助や環境の工夫を行った。行きつ戻りつする幼児の実態を場面ごと到的に捉えることができ、適切な援助や援助のタイミングを図ることができた。

V 研究の成果

1 互いに自分の思いや考えを表現し合い、自己を発揮する幼児を育むことについて

本研究では「互いに思いや考えを表現し合い、自己を発揮する幼児」を育成するため、幼稚園教育要領に基づきながら事例検討を通して、「幼児が互いに思いや考えを表現し合うために必要な具体的な活動」を明らかにした。このことにより、幼児が互いに表現し合う姿に至るまでには、幼児の思いの表出や、思いに沿った行動の過程があることを導き出すことができ、保育者が幼児の実態を適切に捉え、幼児が必要な経験を積み重ねていくことが大切であると分かった。また、「幼児が互いに思いや考えを表現し合うために必要な経験」と、「幼稚園の中で『協同性』が育まれる過程」や「自己発揮するための基盤」とが密接に関連して

いることを捉え、「図2 『幼児が互いに表現し合うために必要な経験』と関連し合う要素」として表すことができ、幼児一人一人の遊びの場面で適切に幼児の姿を捉え援助することができた。幼児の実態に応じた保育者の援助や環境の工夫を探るためにも、今後、「幼児が互いに思いや考えを表現し合うために必要な経験」と「関連し合う要素」を参考にしながら幼児の姿を捉えていくことは有効であると考えられる。

2 友達や集団の中で、一人一人のよさが生きるための保育者の援助や環境の工夫について

幼児一人一人のよさが生きるために、活動場面における幼児の内面の捉えを適切に行う必要がある。本研究では、事例検討や検証保育を通して、幼児の内面を捉える際に用いる三つの観点である「自己発揮」「友達や遊びへの関心」「他者への働き掛け」を明らかにした。この観点を基に幼児の実態を捉えることにより、実態が可視化され、個に応じたねらいを定めて具体的な手だてを考えることが可能になった。また、検証保育の分析から、幼児は友達関係やその時の状況等によって姿が異なるため、「互いに思いや考えを表現し合うために必要な経験」と「協同性が育まれる過程」の捉えに幅をもたせながら、行きつ戻りつする幼児の姿を見越した援助を検討し、より場面に応じた適切な援助を、適切なタイミングで行うことが重要であることが分かった。

主に5歳児の学級経営では、それぞれの園の伝統や指導計画に則り、運動会や生活発表会、お店屋さんごっこ等の行事への取り組みといった、学級全体や学年全体で一つのねらいに向かって「協同的」な活動を展開することがある。本研究では「自己発揮」「協同性」「表現」において、必要な経験は幼児により様々であり、保育者は幼児一人一人の実態を的確に捉えながら「個別最適」な経験が積み重ねられるような指導を工夫することが重要であることを明らかにした。私たち保育者は、幼稚園という集団で生活する場でこそ、幼児一人一人が自己を発揮し、よさが輝いていくことを願っている。そのためにも、幼児が安心して自分を出したり、自分の思いをもったりできるような基盤を大切にしながら保育することが重要であることを改めて確認することができた。

VI 今後の課題

本研究では事例、検証保育共に全て5歳児の姿から、思いや考えを表現し合うために必要な経験を捉え、援助と環境の工夫を検討した。今後は「図2 『幼児が互いに表現し合うために必要な経験』と関連し合う要素」の汎用性を高めるため、3、4歳児の発達に即して検討をしたり、様々な場面の事例を照らし合わせて検討したりしながら保育者の援助や環境の工夫について探っていくことが必要である。また、図2で示した「幼児が自分の思いや考えを表現し合うために必要な経験」と「幼稚園の中で『協同性』が育まれる過程」については、今後も具体的な実践の場面でそれらの関連性をより丁寧に検討していく必要がある。

令和5年度 教育研究員名簿

幼 稚 園

園 名	職 名	氏 名
千代田区立九段幼稚園	教 諭	前 田 実可子
港区立白金台幼稚園	主任教諭	松 原 めぐみ
台東区立石浜橋場こども園	主任教諭	伊 庭 麻裕香
江東区立ちどり幼稚園	主任教諭	◎高 橋 佳 代
目黒区立ひがしやま幼稚園	主任教諭	久 松 奈 央

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部義務教育指導課

指導主事 吉田 元

令和5年度
教育研究員研究報告書
幼稚園

令和6年3月

編 集 東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6849